

科学の倫理

1、問題の概観

① 2つの側面

規制的側面

推進的側面

② 具体例

ヒト ES 細胞（人間？）

ヒト以外の動物

地球温暖化

開発途上国での臨床治験

精神病の疫学的研究

③ 関係する倫理的原理

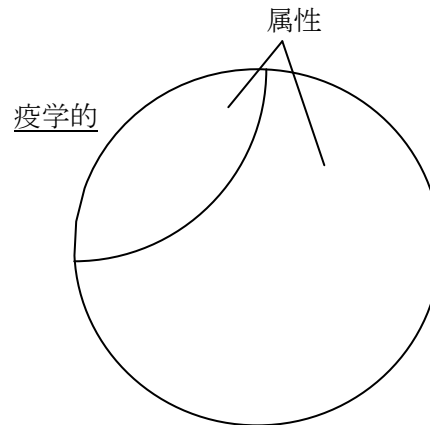
自律尊重原理

無危害原理（他人に危害を加えない）

将来世代への責任

④ 関係者

政治家 宗教家 科学者 一般市民



2、道具化

人間やその他の動物を道具として用いることは許されるか

苦痛を与える実験は許されるか

2つの立場

① 義務論 もっぱら手段（道具）としてのみ用いることは許されない

本人に利益がある場合は別

② 功利主義 コスト（損失）とベネフィット（便益）の総和がどうなるかによる

3、研究目的の倫理的規制

（1）概観

倫理的に問題のある研究目的がある

ある人種が別の人種よりも優れていることを示すという目的

ナチス ユダヤ人の劣等性—人種心理学

Racial psychology

(2) 具体例：エンハンスメント問題

(能力増強)

典型的問題

生まれてくる子—能力障害—2つの手段

1、適切な食事

2、遺伝子工学による治療

2が許されるとすると、2による能力増強も許されるか

① 能力障害の二つの見方

・社会的見解

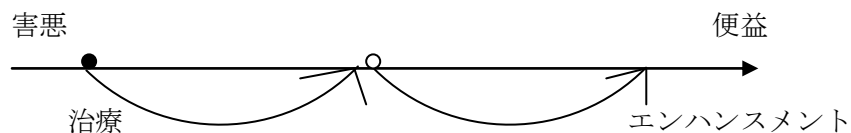
社会的偏見や差別による

・有害見解

合理的な人なら望まないような状態

② 連続性問題

有害見解では、害悪と便益が連続的



③ エンハンスメントへの反論

i、安全性

エンハンスメントそのものへの反論ではない

ii、自然尊重主義

自然が良く、人為は悪い

iii、人間改造

人間の本性を変え、超人類への道を開く

問題点 人間は人格だから尊厳なのだ

iv、行為者性と責任の減退

4、研究方法の倫理的規制

実験参加者の安全性、自律性（止めたい時には止められる）、不要な苦痛

具体例：社会心理学でのだましの使用

(1) 社会心理学におけるだましに関する指針

アメリカ心理学協会（APA）やイギリス心理学協会（BPS）

だましの使用を認める

ただし、一定の倫理綱領を設ける

実験後に、デブリーフィング (debriefing) を行う

実験の真の目的などを明らかにする

(2) だましの使用への反論

① 自滅的

- だましの使用が社会心理学で広く行われる
- 人々がそのことを知るようになる
- 参加者になった人は、実験者の狙いを推測して課題を行おうとする
- 正確なデータは得られない

◎応答：倫理綱領により、だましが使用されるのは限られた実験だけである

② 自律尊重原理の侵犯

インフォームド・コンセントが成立していない

◎応答：間接的なインフォームド・コンセントは可能

③ 研究者の評判の悪化

- だましが一般に知られるようになる
- 研究者への信頼が悪化
- 研究者の評判が悪化
- 研究資金が集まらなくなる

◎応答：倫理綱領を守っている限り、評判低下はない

デフリーフィングを行うと

- ・重要な実験に参加できたことに満足を示す
- ・実験結果が自分にとってつらいものである場合でも、自分だけではないと知って安心する

(3) だましの使用の便益

長期的に有害な心理的結果を生む恐れのある古典的な実験の例

ミルグラムの実験（1974）

学習に対する罰の効果

参加者—教師役 別の参加者（サクラ）—学習者

教師が質問し、学習者が答えるが、間違うと電気ショックを与える

電気ショックは段階的になっている

誤りが繰り返されるたびに、より強いショックを与える

⇒しかし実際には電気ショックは与えられていない

学習者は教師が与えた強さのショックに応じた苦悶の演技をする

⇒学習者の苦悶がある程度大きくなると、教師役の人はそれを気にし出し、ついには実験の中止を訴える

しかし、実験者は実験継続の重要性を説いて、実験の指示に従うよう命じる

⇒結局、65%の参加者が最も強いショックを与えるところまで実験を行った

⇒人間は、天の命令に従順である

反対論

だまされている

参加者は実験中に苦痛を覚える

デブリーフィング後は自分が権威の影響で残虐になれることを知って不快になる

擁護論

ミルグラムは第二次世界大戦での大虐殺が生じた原因を調べようとした

実験結果は個人や社会が権威への従順さを自覚して、大虐殺のような狂気に走らないようにすることが重要であるということを示している